

編 集 後 記

今冬は平成 18 年豪雪以来 5 年ぶりの全国的な豪雪となりました。今冬の雪による死者は平成 18 年豪雪の冬に迫る勢いで増え続け、2 月 21 日現在で 127 人にも達しています（消防庁災害情報）。昨今の傾向として、屋根の雪下ろし等、除雪作業中の死者の占める割合が圧倒的に高いこと、犠牲者の多くが高齢者であることがあげられます。高齢化が進む山間集落では、自治体やボランティア等からの支援はあるものの、それだけで豪雪をのりきることは困難となっているのが実態であり、雪による人的被害の多さの中にそれが現れています。

平成 18 年豪雪の冬には、長期間に及ぶ集落の孤立が発生した新潟県津南町にマスコミ報道が集中しました。今冬は、全国のアメダス観測点の中で積雪の深さが唯一 4 m を超えた入広瀬（新潟県魚沼市）だったように思います。私たちは旧入広瀬村の大白川地区で観測を行っている関係で、アメダス入広瀬で最深積雪が 409 cm

に達した 1 月 31 日に入広瀬を訪れましたが、確かにすさまじい雪の状況であり、特に屋根から張り出し、今にも落ちてきそうな雪には恐怖を感じました。

一方で、気象庁以外が観測している全国の積雪深情報を収集すると、今冬、積雪深が 4 m を超えた地点は入広瀬だけではなく、新潟県内の山間集落を中心として他にも多数あることが分かります。そういった集落では、特定の地点だけに注目や支援が集まる状況に対して、もしかしたら穏やかな気持ちではいられないかもしれません。また、豪雪集落によっては、災害救助法適用の基準として用いられる積雪深の指定観測点になっていない地点もあり、もしかしたら不満の声もあるかもしれません。

いずれにしても、現在の情報技術社会の中、積雪情報の統合一元化、リアルタイムの可視化、観測点の最適化などが求められるのではないのでしょうか。
(河島克久)